



ふえる一方の交通事故――。

昨年中に県下で発生した交通事故件数、(一万二千九十四件)死傷者(九千五十一人)とも史上最高を記録した。そして被害はだんだん私たちの身近かに迫ってきた。

一度事故が起ると、被害者はもちろん家族もろとも悲惨のどん底につき落さ

れることを余儀なくされる。そしてこういつた交通戦争のいたましい犠牲者

が、きょうも県下のどこかで生まれている。

“人ごとではない”交通事故の恐ろしさを私たちは自らまず認識しよう。そ

して、少しでも交通事故をなくすためにはどうしたらよいのか、みんなで真

剣に考えてみよう。

三つのレポート

□破滅に追いこまれる被害者

「なんの罪もないうちの父ちゃんが苦しみ、家族全部も苦しむ。どうしてこんなに……」

とめどもない涙のうちに主婦が訴える。避けようのない田舎の細道で、スピードを出しすぎた車にはねられたこの主婦のご主人は、もう三年以上も入院している。大事な骨髄の傷害で、はじめは大小便も全く不自由で、生けるしかばねであったが、最近はややよくなってい

る。しかし、もとのからだにはなる見込みはない。

強制保険金はもちろん医療費だけでオパー。後遺症の保険金も最高額受け取るが、それで足りるはずはない。

加害者は、夜逃げ同然に他県へ転出行先はかいかもわからない。加害者にも資力がなかったので逃げたのだろうか、あとに残された被害者一家は、泣寝入りという言葉も形容詞にはならない。

いまや「文明の利器」である自動車は、「走る兇器」でもある。その兇器は被害者一人だけでなく、被害者の家族もそして、加害者自身、さらに加害者の家

族も破滅状態となる。

「恐ろしい交通事故」、これは私達が毎日直面している問題なのである。

□事故におびえる運転手

あるプロ運転手。

事故で人を傷つけた。

しかし、示談で警察へ事故届を出さずにすませた。

そのため、運転免許の停止とならず仕事は続けられた。

ところが、相手が悪かった。治療費のほか法外な慰謝料を請求され、少ない月給から毎月支払っている。

生活の苦しさから約束の期限がおくれがちになると、「今からでも警察へ届けるぞ、そうすればお前は免許停止だ。それでもよいか」と、おどされる。

泣く泣く借金をして支払うが、これからの生活がどうなるのか。暗い気持ちでハンドルを握ると、また、事故を起こしかける。事故におびえての毎日の生活は、生きてゆくことすらいやになる。

それでも、ハンドルを握るほかに家族を養う道はいまのところない。

仕事の途中で、交通事故の現場に通らねばならない。交通事故の苦しみは、加害者も受けているのだ。

□後遺症の悲惨さ

「その時はなんともなかったのに、相

手の運転手にも、大したことはないと言っておいたが二日、三日と日がたつにつれてからだの具合が悪い。これは大変と医師に見て貰うと即座に入院をすすめられた。それから、悪化の一途をたどり医師もはじめは二、三週間くらいで治るだろうといっていたが、さっぱりよくなり、もう三カ月も入院している。」と、これはある交通事故被害者の話である。このようなケースは案外多いのである。「打撲症」「むちうち症」などは、被害を受けてから相当時間がたつてから出る場合がある。ある人が事故後半年余りたつて血を吐いた。本人はまさか交通事故によるものとは思わず、結核か胃かいよりのつもりで診察して貰ったがそれでもない。さらに精密に診断して貰うと、交通事故で受けた傷害が原因であることがわかった。幸い生命に別条はなかったが、恐ろしい事実である。

他県の資料ではあるが、交通事故後の追跡調査で、精神異常となった例も出ている。交通事故に多い頭部傷害が原因と思われるが、これなどは全く悲惨というほかはない。後遺症の恐ろしさを、運転手も歩行者も知れば、もっともっと交通事故は少なくなるにちがいないが……。

以上、三つのレポートはいずれも交通事故のいたましい犠牲であり、私たちの身に生かされているアクシデントなのである。これらの実態に私たちはもっと素直に目を向けながら、交通事故をなくすためにはどうしたらよいのか真剣に考えてみることにしよう。